

避難所運営ゲーム (HUG) 被災経験がないからこそ ゲームで体験しておこう

講師：松山市消防局 地域防災課 副主幹 芝 大輔さん、主査 二宮 達司さん
参加者：女性…19 人、男性…16 人、見学者…1 人

〈開催趣旨〉

平成 28 年 4 月に発生した熊本地震。度重なる余震もあり避難所の混乱ぶりは記憶に新しい。この地で大地震が発生したら私たちは過去の教訓を活かせるだろうか。ゲームでは、発災直後に次々とやってくる避難者の状況や要望を考慮しながら避難所の受け入を体験してもらい、終了後は要配慮者等の対応を振り返る。ゲーム未体験の人は、緊迫した避難所の現状の理解を深める機会に、経験者は対応の習熟の機会とする。

〈内容〉

ゲーム進行は講師の二宮さん。事情を抱えた人が避難所に次々来ると同時に、災害対策本部からも情報が頻繁に入る。ゲームを終えるころには机は大混乱となっていた。



休憩をはさみ、「産婦と新生児」「高齢者と座敷犬」「認知症者」「トイレ」の 4 項目を振り返り、その対応についてグループごとに発表した。

講師の芝さんからは、避難者の中には専門職の方もいるので協力してもらうことや、スムーズな運営には平時からのコミュニケーションが重要。わかりやすい掲示物は仕事を減らすことができるので、日付を入れ、「〇〇できる」といった前向きな表現が望ましいとのアドバイスがあった。また、ゲームの避難者は文句も言わないが、現実はずう！不満も苦情も限りなく出ると話された。

会の終盤では、大会作成のヘルプカードを紹介。熊本地震の出来事から、支援を必要とする人がヘルプカードを挙げ、互いに助け合える仕組みが必要と発表した。

〈缶詰の試食〉

黒潮町の缶詰 (7 大アレルギー不使用) 試食と、ローリングストック法を紹介。

〈まとめ〉

会場は参加者の熱気で蒸し暑く、3 時間はあっという間に過ぎた。避難者の受け入れ、運営の難しさ痛感したことは意義深く開催趣旨は概ね達成できた。また、振り返りで要配慮者への視点も欠かしていないが、掲示物の振り返りやグループ内の話し合いに時間が足りなかったことは反省点だ。今後は、HUG カードの内容を分析し、避難者の受け入れについてさらに学習を深めていきたい。

〈参加者の声〉アンケートより

黒潮町の缶詰の試食

- ・冷たいままでもおいしかった。
- ・今後の備蓄食品の参考にしたいと思う。

避難所運営ゲーム (HUG) をして気付いたこと

- ・いろんなことが一斉に起きる。対応は待ったなしだがパニックになってはいけなない。
- ・これが現実だったらかなり苦情が出ていたと思う。
- ・震災直後の騒然とした様子を体験できた。市内でも避難所に指定されているところはいざという時の想定した準備が必要。
- ・HUG は何度体験してみてもその度に新しい課題があり、考え込むことばかりで実際にできるかどうか不安が増した。
- ・とても参考になり、意欲がさらに深まった。
- ・いろんな人の意見が聞けて非常に勉強になった。

